

「人間の政治」のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 彬 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8461

<巻頭言>

「人間の政治」のために

栗原 彬

水俣病事件を象徴的に物語るできごとは、1971年、73年の、水俣病患者たちによるチッソとの自主交渉だった。東京のチッソ本社で行われた自主交渉を通じて、企業は「お金をいくら出せばいいか」と繰り返し、水俣病患者たちは「人間として謝まれ」と言い続けて、両者の論理は平行線をたどった。

とりわけ、水俣病患者川本輝夫とチッソ社長島田賢一との差しでの対話、ないし異交通は興味深い。論理と情念を尽して「人間の償い」を迫る川本の言葉がふっと転調して島田に語りかける。「(社長の帰依する)禅宗は何を教えよるですか？」返す社長の言葉がほぐれてくる。「あなたの座右の銘は何ですか?」「趣味は一番なんがあんた好きですか?」私は無趣味で、読書ぐらいしか…。「どんな本を読んで一番感銘をうけたですか。あんたが読んだ本と、小崎さんの死とか松本さんの死とかと結びつかないですか。読んでみて、ぜんぜん無縁ですか」。

すなわち、川本輝夫にとって、水俣病は「公害問題」にとどまらない。自他の双方に「人間がどげん生きないかんか」を問うている。チッソ、熊本県、国にも人間を見取り、人間として損なわれたものの償いを求めるばかりか、加害者たちの人間性をも救い出すこと。

まぎれもなく社会・心理臨床の場が立ち上っている。いわば臨床家の川本輝夫が、重篤な経済病患者のチッソ社長の聞こえない人間の声になお耳を澄まそうとしている。産業の発展をとめることはできない。多少の犠牲はやむを得ない。その犠牲に対しては金で補償して平衡を回復すればよい。こうした経済至上主義を患らう患者のほとりに立って、患者の心の中に動き始めていることに目をとめ、その変容をアシストすること。

「政治とは、他者を動かすこと」というマックス・ウェーバーの政治の最小限の定義に従えば、社会・心理臨床の場は、常に複数の政治がせめぎ合う場でもある。経済優先、不条理な生命系の殺傷、そして万事金で片付ける土俵の中に人々を動かそうとする「システムの政治」と、人間の方へ自他ともに動かそうとする「人間の政治」と。

「人間の条件」(ハンナ・アレント)を剥奪された、排除と抑圧が深い場所にいる人々の中から、自他双方に失われた人間を取り戻す対抗臨床・対抗政治としての「人間の政治」が生まれる。もとより、全ての弱者から、とは言えない。鈍感な弱者から人間の政治は生まれない。ナイジェリアのオゴニ人作家、ケン・サロ＝ウィワは、半農半

漁の少数民族オゴニが、国際石油資本シェルによる石油採掘と、シェルと結託した多数派民族の軍事政権による虐殺と環境破壊によって生存の危機に立たされると、オゴニ人生存運動を組織して抗議行動を行なった。彼は、18ヶ月の拘留の後、1995年軍事政権によって処刑された。黒人の植民地主義は西欧の植民地主義よりもっと危険になる場合があるとは、生前彼が残した言葉である。鈍感な弱者は権力者に容易に転化する。鈍感な弱者は告発されねばならない。そのほとりに立つことは、強者よりも困難かもしれないけれど。

川本輝夫は「水俣病は終わっていない」ことを説く一方で、長崎原爆、カネミ油症事件、土呂久砒素中毒事件など、近代のシステムが行なってきた近代化という「人体実験」の被害者たちへのまなざしの広がりの中で、また、胎児性水俣病患者と未来の子どもたちを視野に入れながら、「ひとり水俣病患者だけが救われればよいのではない」と言う。

臨床家川本輝夫の遺した社会臨床の教えは2つあると思う。「目の苦しむ人を救え」。そして「受難死した魂、未来の時間に到来する新しい人を構造的に救え」と。